

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Commentaries on the Zhongguo xiaoshuo shilue : Lu-xun's a brief history of Chinese Fiction XIX, XX

メタデータ	言語: zho 出版者: 公開日: 2003-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中嶋, 長文, Nakajima, Osafumi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/822">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/822</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 中國小説史略考證 第十九續完・第二十

中 島 長 文

## 第十九篇 明之人情小説（上）續

10 『續金瓶梅』前後集共六十四回、以至羽正奇之」而已

一八三—六

『大略』鉛印本と『史略』初版では、署名の「魯諸邑丁耀亢參解」、及び「而丁耀亢即其撰人矣」の「亢」字をいずれも「元」字に作り、「耀亢字西生」の「耀亢」の下に「（作元或作光者誤）」と注記を入れている。魯迅が見たテキストが「元」に作っていたからであろう。「光」については『聊齋志異』呂湛恩注が「耀光」に作る（後掲『小説舊聞鈔』参照）。しかし合訂二版以後はすべて「亢」に作り、注記を削っている。また鉛印本と初版では、後の『諸城志』を單に「志」とのみ作るが、合訂二版で現行の如くに訂された。「郁郁」は鉛印本より三八年版全集まで「鬱鬱」に作り、五七年版全集で同音字に變えられた。また「感應篇序」の引用文中「戒諭臣工」は順治十七年原刊本（『古本小説集成』）も『三種』本も「諭戒」に作る。あるいは筆寫の際の顛倒か。

「小説的歷史的變遷」五云、還有一種山東諸城人丁耀亢所做的『續金瓶梅』、和前書頗不同、乃是對於『金瓶梅』的因果報應之說、就是武大後世變成淫夫、潘金蓮也變爲河間婦、終受極刑。西門慶則變成一個駭戇男子、只坐視着妻妾外遇。——以見輪迴是不爽的。從此以後世情小說、就明明白白的、一變而爲說報應之書——成爲勸善的書了。這樣的講到後世的事情的小説、如果推演開去、三世四世、可以永遠做不完工、實在是一種奇怪而有趣的做法。但這在古代的印度却是曾經有過的、如『鶯堀摩羅經』就是一例的。

『續金瓶梅』の主人公たちの再生を説明する部分はずでに「中国小説の歴史の變遷」の譯者丸尾常喜氏が指摘するよ  
うに、『玉嬌李』の設定ととりちがえたのである。しかしその後の叙述は『金瓶梅』の續書に共通する。『鶯堀摩羅經』は『央掘摩羅經』として大正新脩大藏經の第二卷阿含部下に収録される。

『小説舊聞鈔』「讀金瓶梅」引（乾隆『諸城志』三十六文苑）云、丁耀亢、字野鶴、少孤、負奇才、倜儻不羈。弱冠爲諸生、走江南、遊董其昌門、與陳古白、趙凡夫、徐闇公輩聯文社。既歸、鬱鬱不得志、取歷代吉兇諸事類、作『天史』十卷、以獻益都鍾羽正、羽正奇之。明季鄉國盜起、時益都王遼坦用劉澤清兵捕土賊、耀亢素善遼坦、遇於日照境、更爲募數千人、解安邱圍。順治四年入京師、由順天籍拔貢充鑲白旗教習、其時名公卿王鐸、傅掌雷、張坦公、劉正宗、龔鼎孳皆與結交、日賦詩陸舫中、名大噪。陸舫者、耀亢所築室、而正宗名之者也。後爲容城教諭、遷惠安知縣、以母老不起。爲詩踔厲風發、少作卽饒丰韻、晚年語更壯浪、開一邑風雅之始、縣中諸詩人皆推爲先輩。六旬後病目、自署木鷄道人、更著『聽山草』、卒、年七十二。詩甚多、李澄中嘗爲選擇、序曰、「余取其言之昌明博大者、以與世相見云。」

（又十三藝文考）云、丁耀亢『逍遙遊』一卷、『陸舫詩草』五卷、『椒邱詩』二卷、『江干草』一卷、『歸山草』二卷、『聽山亭草』一卷、『天史』十卷、『西湖扇傳奇』一卷、『化人遊傳奇』一卷、『蚺蛇膽傳奇』一卷、『赤松遊傳奇』一卷。

〔四庫全書總目〕一百八十二集部別集類存目九云、〔丁野鶴詩鈔〕十卷（江西巡撫採進本）。國朝丁耀亢撰。耀亢字西生、號野鶴、諸城人、順治中由貢生官至惠安縣知縣。是集凡分五種、曰〔椒邱集〕二卷、起甲午、終戊戌、官容城教諭時所作。曰〔陸舫詩草〕五卷、起戊子、終癸巳、皆其入都以後所作。曰〔江干草〕一卷、起己亥、終庚子。曰〔歸山草〕一卷、起壬寅、終丙午。曰〔聽山亭草〕一卷、起丁未、止己酉。自〔陸舫詩草〕以前、耀亢所自刻、〔江干草〕以下、皆其子慎行所續刻也。耀亢少負雋才、中更變亂、棲遲羈旅、時多激楚之音。自入都以後、交遊漸廣、聲氣日盛、而性情之故亦日薄。王士禎〔池北偶談〕載其陶令兒郎諸葛妻一律、謂、〔野鶴晚遊京師、與王文安諸公倡和、其詩亢厲、無此風致。〕蓋亦有所不滿矣。

〔聯齋誌異〕呂湛恩注十六云、野鶴公名耀光、字西生、貢生、明侍御少濱公子、官容城教諭、遷惠安知縣。著有〔陸舫〕、〔椒邱〕、〔江干〕、〔歸山〕、〔聽山〕等詩集行世。〔魯迅〕案、丁名耀亢、作光誤。

〔續金瓶梅〕第六十二回云、再講一段仙家因果、一脈相傳、在五百年前的精氣、如投胎合體一般、豈不奇怪。當初東漢年間、遼東三韓地方、有一邑名鶴野縣、出了一個神仙。在華表莊、名丁令威、學道雲游在外、久不回鄉。到了晉末、南北朝大亂、遼東爲烏桓所據、殺亡大半、人煙稀少。忽然華表石柱上、有三丈余高、落下一隻朱頂雪衣的仙鶴來、終日不去、引得左近人民去觀看、他也不飛不起。那些俗子村夫、還將磚石弓矢去傷他的、他安然不動、那磚石弓矢也不能近他。人人敬他是仙人托化、來此度人。果然到了八月中秋、半夜子時、長唳一聲、化一道人歌曰、「有鳥有鳥丁令威、去家千歲今來歸。城郭如故人民非、何不學仙豕鬣纍。」向街頭大叫、說「五百年後、我在西湖坐化。」後來南宋孝宗末年、臨安西湖有一匠人善于鍛鐵、自稱爲丁野鶴。棄家修行、至六十三歲、向吳山頂上結一草庵、自稱紫陽道人。庵門外有一鐵鶴、時有群兒相戲、說誰能使鐵鶴飛去就是神仙。只見了道人從旁說、「我要騎他上天、等我叫他先飛、

我自騎去。」因將手一揮、那鐵鶴即時起舞、空中回旋不去。丁道人却向庵中沐浴一畢、詩曰、「懶散六十三、妙用無人識、順逆兩相忘、虛空鎮常寂。」書畢、盤足而化。群兒見丁道人騎鶴過江去了。至今紫陽庵有丁仙遺身塑像、又留下遺言說、「五百年後、又有一人、名丁野鶴、是我後身、來此相訪。」後至明末、果有東海一人、名姓相同、來此罷官而去、自稱紫陽道人。未知是否、且聽下回分解。詩曰、坐見前身與後身、身身相見已成塵。亦知華表空留語、何待西湖始問津。丁固松風終是夢、令威鶴背未爲眞。還如葛井尋圓澤、五百年來共一人。〔金瓶梅續書三種〕本（一九八八・齋魯書社）。

「太上感應篇陰陽無字解序」云、嘗聞天下有道、聽治于人、天下無道、聽治于神。神者體物而不可見、來格而不可度。祈福則曰有神、恣惡必曰無鬼。鬼神以助王法之不及者也。自姦杞焚予『天史』于南都、海桑既變、不復講因果事。今見聖天子欽頒『感應篇』、自制御序、諭戒臣工、可謂皇皇天命矣。海內從風、遂有廣其箋注、滙集徵驗、以堅人之信從者。上行下效、何其盛歟。亢不敏、病臥西湖、既不克上膺命簡、而效職于民社、謹取御序頒行『感應篇』而重鋟之。欲附以言、而箋者已詳之矣。吾聞天道至秘、以言解之而反淺。人心惟微、以法繩之而愈遁。不如以不解解之。姑因大易陰陽、爲人心禍福之幾。畫像白黑、定天道殃祥之數。數極而九貫盈也、次而七之、五之、一三三之、因其功過概其量也。談『易』者始于無極、參禪者、妙于無字、解者解之、不解者不必解也。附以『天史』管見十章、如左注『春秋』、莊演『道德』同一無解耳。時順治庚子孟秋、西湖鷗吏惠安令瑯琊丁耀亢謹序。（同上）。順治庚子是一七年、西紀一六六〇年。

「太上感應篇」は老子が因果應報を説いたものとされるが、實際は宋代に編まれた、善惡を區別し、平易に社會的規範道德を説いた書。僅か千二百字足らずに纏められているので童蒙のための勸善の書として廣く行き渡った。ここでは「無字解」、解説の言葉のない解説という意味で本文そのものが掲げられている。實際の解釋は『續金瓶梅』の物語の一章一章がそれだというのである。

丁耀亢の生卒年 『史略』は「一六二〇—一六九一」とするが何に基づいたのか未詳。『諸城志』も享年を「七十二」と言うだけで生卒年を言わない。鄭騫はその「善本傳奇十種提要」（『燕京學報』第二十四期・一九三八）で丁耀亢の傳奇三種を解説し、『化人遊』の項で丁の生卒年を考證している。

余曾見耀亢手批正德刻本『李杜合集』、朱藍滿楮、書法怪偉。卷尾有跋云、……順治癸巳、余卜居海村、借而讀之。甲午赴容城教署、携爲客筭。……感而書之。琅琊丁耀亢題于容之梅軒、時五十六。（下有「丁耀亢印」及「陸舫

兩朱印）

甲午爲順治十一年據此推定、耀亢生於明神宗萬曆二十七年巳亥、卒於清聖祖康熙九年庚戌。

萬曆二十七年は西紀一五九九年、康熙九年は一六七〇年、したがって「一五九九—一六七〇」と作るべきである。

これは孔另境『中國小説資料』（一九五九年版）をはじめ、葉德均「小説瑣談」（『戲曲小説叢考』一九七九・中華書局）、趙景深『中國小説史略傍證』（九〇頁）が言及する。

また『史略』はその履歷について福建惠安縣令に「不赴」とする。これは乾隆『諸城志』に據ったのだが、黃霖は『三種本』の前言で、その知人の丘石常の『楚村詩集』に「送鶴公令惠安」「至日送鶴公令惠安」の二詩、また「祝丁太母八秩序」に「野鶴先生幸惠安之明年」とあるのを舉げて、實際には「（順治）十六年遷惠安知縣。他不願從政、越年卽以母老告退」と考證する。ちなみに彼の「感應篇無字解」の序にも「時順治庚子孟夏、西湖鷗吏・惠安令瑯琊丁耀亢謹序」と記す。なお「感應篇序」に「西湖鷗吏」と自稱し、「續金瓶梅集序」に「西湖釣叟」ないしは「西湖釣史」とあり、また評者として「湖上釣史」とある所を見れば、これらの別號はすべて同一人物、丁耀亢のものである可能性が大きい。

版本。この書は順治年間？に上梓されたのち發禁の書となって焚書にあい、そのため丁耀亢は下獄した。従つて現在順治原刊本と稱されるものはほとんど天下の孤本で、『孫目』は「傳惜華藏順治原刊本、半葉九行、行二十字。附精圖六十四頁、記刻工曰、胡念翌寫、黃順吉、劉孝先刻。」と述べる。最近排印本となつた『金瓶梅續書三種』本（一九八八・齋魯書社）は順治本に據るとは言うが所藏には觸れない。「順治本『續金瓶梅』書前有五八幅精美挿圖、圖上還在有黃順吉、劉孝先、王濱卿等刻工姓名」と言い、刻工名は重なるところがあるものの、圖葉の枚数が一致しないから、傅氏舊藏の書かどうかは分らない。しかし傅氏舊藏影印の古本小説集成本とは基本的に一致する。後に坊刻本がいくつか出る。務本堂藏版本、本衙藏版本、嘉慶二年重刊本などが知られる。錯訛・刪節が多いという。近刊では先の『金瓶梅續書三種』本の他、中州古籍出版社の標點排印本があるが據つた刊本は不明。影印本には傳惜華藏の順治十七年原刻本だという古本小説集成本（上海古籍出版社）がある。

11 『續金瓶梅』主意殊單簡、以至終成痼疾也

一八四十二

各版の間に異體字を除いて異同はない。

『師弟答問集』五八頁云、

〔増田問曰〕229 『續金瓶梅』主意殊單簡、……一日施食、以輪廻大簿指點衆鬼、……輪廻大簿を衆鬼に見せて or 輪廻大簿で衆鬼を調らべて？ 〔魯迅對前者答曰〕yes 〔對後者答曰〕no.

〔増田問曰〕至潘金蓮則轉生爲……名金桂、夫曰劉癩子、其前生實爲陳敬濟、以夙業故、體貌不全、金桂怨憤、因招妖蠱、又緣受驚云云、〔因招〕誰が妖蠱を招いたか？妖蠱が自らやつて來たか？ 〔魯迅答曰〕金桂が怨憤スル、ソノ缺點ヲ乘ジテ妖蠱ガ自ラヤツテクル、ダカラ「因ツテ妖蠱ヲ招イタ」ト云フ。

12 余文俱述他人牽纏孽報、以至卽其例也

一八四一

『大略』鉛印本は「(第一回)也」を「(第一回)者是也」に作るが、初版で現行の如になる。「夫婦一倫」の「倫」字、第三版から第七版まで「淪」に誤まる。『三種』本では「乃自果報」の「自」字を「因」字に作る。

『續金瓶梅』の著者の三教の關係に對する態度についての記述は魯迅獨自の見解だと思われる。

13 『續金瓶梅』引用例文

一八五十三

各版間の異同は三箇所、「倒講了个色字」の「倒」字を鉛印本から第七版まで「到」に作るが、訂正版で「倒」に改められ、「好个快活所在」の「个」字は鉛印本から三八年版全集まで「不」に作るが、五七年版全集で「个」に改められた。句讀は三八年版全集まで「好个快活」で句點を切っていたのが、五七年版全集で「好个快活所在」で切るよゝに改められた。確かに『三種』本は改められた形になっている。しかし著者自身が訂した箇所はともかく、「好不快活」は常套語であるし、「所在」の句讀も下に附くか上に附くか微妙な所である。改めるのなら注記して改めるべきで、著者の原文は引用文と雖も尊重せらるべきである。なにより據ったテキストを明らかにするための手懸りとなるからだ。ちなみにこの箇所不思議なことに『隔簾花影』第二十六回の文と「到」字も「不」字も一致する。

校勘に用いたのは『三種』本、東文研藏本、臺灣天一出版社影印本だが、天一影印本は『史略』引用文に近いが、第三十七回が第三十五回に當り、明らかに刪節本であるため、また東文研藏本は粗本で到る處錯訛があるため、ともに標記しない。いまは『三種』本との異同に止める。『三種』本は「上了一本」を「上了一个本」に作り、「說道」の「道」字が無く、「三處爭訟」を「三家爭訟」に作り、「自己不獨得」の「獨」字無く、「便把孔夫子居中」を「把一尊孔夫子塑居中」に作り、「銀瓶做過臥房」の「過」字無く、「浮浪弟子們」の「們」字がない。

14 又有『隔簾花影』四十八回、以至合數之得三世也

一八六十四

句讀を除いて各版の間に異同はない。

『隔簾花影』序云、『易』曰、「積善之家、必有餘慶。積不善之家、必有餘殃。」『書』曰、「作善降之百祥、作不善降之百殃。」從古以來、福善禍淫之理、天固不爽毫厘。即或有作善之人未嘗獲慶、作惡之人未見遭殃、其皆不無可疑。然天道無私、不報於其時、必報其後、不報於其身、必報於其子孫、從未有善人永不獲福、惡人世享豪華者。報應之機、遲速不同、人特未之深觀而默察耳。

『金瓶梅』一書、雖係空言、但觀西門平生所爲、淫蕩無節、蠻橫已極、宜乎及身即受慘變、乃享厚福以終。至其報復、亦不過妻散財亡、家門冷落而止。似乎天道悠遠、所報不足以蔽其辜。此『隔簾花影』四十八卷所以繼正續兩編而作也。至於西門易爲南宮、月娘易爲雲娘、孝哥易爲慧哥、其餘一切人等、名目俱更、俾閱者驚其筆端變幻、波瀾綺麗、幾曾識其所自始。其實作者本意不過借影指點、去前編有相爲表裏之妙。故南宮吉生前好色貪財等事、於卷首輕輕點過、以後將人情之惡簿、感應之分明、極力描寫、以見無人不報、無事不報、直至妻子歷盡苦辛、終歸於爲善以贖前愆而後已。

揆之福善禍淫之理、彰明較著、則是書也、不獨深合於六經之旨、且有益於世道人心者不小。後之覽者、幸勿以空言而忽之也可。四橋居士謹題（『金瓶梅續書三種』本）

『小說舊聞鈔』『金瓶梅』引俞樾（『茶香室叢鈔』十七）云、今『金瓶梅』尚有流傳本、而『玉嬌李』則不聞有此書矣。余從前在書肆中見有名『隔簾花影』者、云是『金瓶梅』後本。余未披覽、不知是否此書也。

『譚瀛室筆記』見本篇9所引。

撰者 刊本に撰者の名を題していないので不明。『孫目』は「首四橋居士序、當即作者。按『快心編』評者亦署「四橋居士」、與此同。書即竄易丁耀亢書爲之、殆是康熙後書肆所爲。」と述べ、平步青が『霞外攬屑』卷九で呉梅村が作者だというのを「不可信」と退けている。作者については今もって『孫目』に言う程度のことしか分らない。

『師弟答問集』五八頁云、

〔増田問曰〕231 一名『三世報』、殆包舉將來擬續之事、或并以武大被酖、亦爲夙業、合數之得三世也。(武大が毒殺されたこと、三世といふこと、どんな關係を有するか? 〔魯迅答曰〕コノ「世」トハ父子ノ「世」デナイ。一人ノ輪廻上ノコトデス。

一世 二世 三世

== == ==

武大ノ前身——武大——其ノ後身

『隔簾花影』については、「小説の歴史的變遷」で『續金瓶梅』と『玉嬌李』とを混同したのと同じような勘ちがないしは誤解があるようだ。まず「書末不完、蓋將續作、然未出」と述べる部分。『隔簾花影』の書末は『續金瓶梅』に比して確かに簡潔であるが、これは『續金瓶梅』が何事もみな『感應篇』と結びつけてする御托の冗長な部分を削っただけで、全體の筋の運びなどはほとんどそのまま『續金瓶梅』を襲っていて、雲娘が息子の慧哥と再會を果したのち、幸せのうちに大往生を遂げ、慧哥も長壽を全うし、善人は福を得、悔改めた人々もそれなりの生を送るといふ、いわば團圓で終っている。したがって「書末不完」とは言えない。この説はあるいは次に續く「一名『三世報』」の「三世」に關わる解釋と關係して出て來たものかもしれない。「三世」についての魯迅の解釋はこの節の末に述べられ

ているが、上掲増田涉宛ての返答によりはつきりと見られるように、登場人物の前世、現世、來世（後身）を合わせて「三世」とする。しかしこの説はこと『隔簾花影』に關する限りは誤りとするしかない。なぜなら「三世報」について、この書自體その第一回で次のように述べているからである。

若論他（南宮吉西門慶）既一身死了、便有些冤債、也可算做償了。誰知這冤債不是糊塗償得的、有一分定要還他一分。生前不能償、死後也要償的。自身不能償、子孫也要償的。今生不能償、後世也要償的。萬萬不爽、所以叫做「三世報」。但償在眼前、人便知道他從前的過惡、便歡喜道、「這是現世報了」。若報到死後、或是子孫、或是後世、人便有知有不知。就知道些影響的大意、也不知天理之報應一一如此之巧妙。故書窗閑暇、聊將這南宮吉死後與子孫後世昭報之事、細細拈出、請世人三餐飯罷時一着眼、五夜夢回裏一思量、也可見積善降祥、積不善降殃、天理之昭然有如此、稍於人事之邪心收一收、庶不負一番立言之意。上掲書

これに據れば、一は死後の報、つまり地獄落ちであり、一は子孫が替って償う、子孫へのたたきであり、もう一は後世、つまり生れ變った人間への應報をいう。しかも一つ一つの應報は一人の登場人物がすべてそれを受けて話が續くというわけではなく、それぞれの登場人物の罪科に應じて分散されるというものであるらしい。それ等を合せて「三世報」というのであるから、魯迅の説とはちがう。物語では雲娘と慧哥は輪廻を脱し、南宮吉の後身である賈金哥は盲目になつて十年乞食という苦役を負わされ、潘金蓮の後身鮑丹桂等は悔悟して善人となる。したがって話の筋からだけではなく、これらの登場人物が次の世で支拂わなければならない債務はなくなっているから、「三世報」との關連で言えば續編ないし後編は考えにくい。

さらに『史略』は「三世報」の説明として武大を持ち出している。しかし武大は『續金瓶梅』第四回「武大郎豊都

城告状」でこそ、潘金蓮と共にその前身がごく簡単にのべられるけれども、『隔簾花影』ではその章が刪られていて、武大の話は全編を通じて一度も出てこない。すでに述べたようにここには魯迅の勘ちがいないしは読みちがいがあられると思われ。いずれにせよこの節の後半は書き改める必要がある。

版本 魯迅が『隔簾花影』のどのような版本を見たのかは、引用がない上に加えて、書帳、日記、藏書目録にも記録がなく、全く分らない。刊本では「本衙藏板」と題するものが知られており、補刻本もあるらしい（『大塚目』）。近刊に上記『續金瓶梅三種』本の他、訥音居士『三續金瓶梅』と合わせた『金瓶梅續』（一九九三・春風文藝出版社）、『隔簾花影』上下二卷（一九九三・中州古籍出版社）がある。いずれも標點排印本だが、前者には出版説明はあるものの據った刊本を言わない。後者は暢銷を狙っただけの粗本で、出版説明すらない。ともに刪節本である。影印本では上海古籍出版社藏の本衙藏板本を用いた古本小説集成本（上海古籍出版社）二冊がある。

（二〇〇三年七月二五日）

## 第二十篇 明之人情小説（下）

1 『金瓶梅』『玉嬌李』等既爲世所艷稱、以至遠過于其在中國

一九一

『大略』寫印本十三、明之人情小説云、明人小説之涉及歷史者、若非神怪、卽爲英賢、而又多偏于武勇、故一方復有述才士之書、以補其闕。其所叙述、雖亦英賢、然大率假立姓名、不必實有其人、蓋文士之在史策、常無與于顯赫之功、而貴人達官之有文名者、又每與風流跌宕不相稱、不足爲書中主人。故無寧虛造姓名、較便抒寫、按其根抵、實亦英賢小説之支流也。

唐人記傳中、亦頗有言文人異遇、如游仙窟章臺柳傳者。然除鶯鶯傳而外、殆與後來之此類小説不相關。倘或相同、亦緣人同此心、因而偶合、非必出于仿效矣。惟文翰之士、既無驚人勲業、比擬武人、則所述自不得不以文雅風流、功名遇合爲主體、以是描寫亦漸入于人情。此在唐亦屬傳奇、宋則隸于小説、又以事迹多始乖而終合、故時人稱爲佳話、今名之曰人情小説。

『大略』寫印本では前篇の『金瓶梅』等の世情書を扱わなかつたので、『三國志演義』や『水滸傳』など歴史に題材を取つた小説が武人に偏つてゐるのに對し、この篇で取上げる作品群は才子を主人公としてゐるが、ともに英賢を主人公としてゐるから、こちらはその英賢小説の一支流だと、かなり苦しい論理を展開してゐる。しかし『大略』鉛印本ではすでに『金瓶梅』に関する叙述も取入れて、世態炎涼の書とした上で、ひつくるめて「人情小説」と定義した。英賢小説などという不安定な用語を放棄して、『金瓶梅』等と才子佳人小説という對立項になるものとして一つに括つたので「人情小説」という用語も社會的な奥行きを持つようになつた。

『大略』鉛印本は「惟書名尚多蹈襲」の「蹈襲」二字を「效法」に作り、「如『玉嬌梨』『平山冷燕』等、皆是也」の「等」を「及『林蘭香』」に作る。『史略』各版の間に異同はない。『林蘭香』は「隨緣下士編輯、寄旅散人評點」と題する書で、『金瓶梅』などと同じく主要な登場人物の姓、ないしはそれを象徴するものを組合せて書名としたものである。魯迅が『大略』鉛印本で取上げたのもそれが最大の理由であろう。しかし初版でそれを刪つて「等」としたわけは未詳。最も早い刊本が道光十八年の本衙藏板で、清も中期以後だから刪つたのか、それともこの書の結末が他とはちがい團圓に終らず悲劇で終つてゐるためか、いずれにしろ分明ではない。近刊に春風文藝出版社の標點本（一九八五）があり、道光十八年刊本を底本とする。

「小説的歴史的變遷」第五講、明小説之兩大主潮云、如上所講、世情小説在一方面既有這樣大講因果的變遷、在他方面也起了別一種反動。那是講所謂「溫柔敦厚」的、可以用『平山冷燕』、『好逑傳』、『玉嬌梨』來做代表。不過這類的書名字、仍多襲用『金瓶梅』式、往往摘取書中人物的姓名來做書名。但內容却不是淫夫蕩婦、而變了才子佳人了。所謂才子者、大抵能作些詩、才子和佳人遇合、就每每以題詩爲媒介。這似乎是很有悖于「父母之命、媒妁之言」的婚姻、對于舊習慣是有些反對的意思的、但到團圓的時節、又常是奉旨成婚、我們就知道作者是尋到了更大的帽子了。那些書的文章也沒有一部好、而在外國却很有名。一則因爲『玉嬌梨』、『平山冷燕』、有法文譯本、『好逑傳』有德・法文譯本、所以研究中國文學的人們都知道、給中國做文學史就大概提起它、二則因爲若在一夫一妻制的國度裏、一箇以上的佳人共愛一箇才子、便要發生極大的糾紛、而在這些小說裏却毫無問題、一下子便都結了婚了、從他們看起來、實在有些新奇而且有趣。

狩野直喜「支那小説史」第八、明代の小説云、『玉嬌梨』支那の小説戲曲の或るもの十種を選び、之れを十才子書とい

ふが、其の中に『玉嬌梨』あり。一寸注意して置き度きは、別に『金瓶梅』の後篇の如きものに、『玉嬌李』といふものありし由兪樾がいつて居るが、今余の話さんとする小説は全く別物なり。

さて此の書は日本にも早く渡つたと見ゆれども、餘り盛行せざりしが如し。余の知る範圍にては譯書あるを聞かず。然るに西洋には此の書の事早く聞こえ、又た其の翻譯もありて、チャイルス氏の如きは、其の『支那文學史』の内に、明代の代表的小説として其の名を擧げて居る。それは何故かといふに、此の書は恐らく支那に於ける佛國宣教師の手に由りて本國に送られたるものが、巴里の圖書館に一本を備へありしが、一八二六年に至り Collège de France の支那學教授 Abel-Rémusat なる人、其の全部を譯し、名づけて *In-kiao-li ou les deux Cousines*, Vol. II といへり。又た一八六四年に至り、Rémusat に代りて教授となりし Stanislas Julien が同く *Les deux Cousines* と題して翻譯をなしたり。又た英國にては Staunton なる人一八二一年に *Narrative of a Chinese Embassy* と題する一書を著はしたりしが、其の内に此の書の初めの四回丈を譯して、之れを載せたり。又た Rémusat の佛譯成りしや、其の翌年 (1827) に *The Two Fair Cousins* の名を以て英語に譯されしが、獨り英國に限らず、獨逸、荷蘭の國語にも譯出されて大變流行したり。

一體、此の書の作者は唯荻岸散人編次とあり。其の姓名も又た書の成りし年代も分らず。余はチャイルス氏の明の小説といふは、何の證據あるやと實は疑つて居たが、英譯『玉嬌梨』の note に、此の書巴里の王立圖書館に藏むる事已に二百年に近しとあり。一八二七年より溯りて數ふれば、恰も明末に當る。是れを以て其の明人の手に成りし事明なりとす。

又た此の書はかく英譯ともなりしを以つて、かの文豪カーライル之れを得て、其の友 John Sterling 氏に送り

しが、Sterling も讀みて、大いに之れを賞し、誠に之れを書きしものは支那の天才なるべしといへりとぞ。此れは Carlyre のかきし Life of Sterling, 1823 の内にある由なれども、本學になければ、之れを見たる譯にあらず。本學に藏する英譯の『玉嬌梨』の首に、所有者が抄録する文句によりて之れを述べるのみ。

此の書は余輩より見れば、支那小説中第一流のものとは考へ難し。然るに何故に西洋の東洋學者は勿論、當時の文士たちが之れを愛讀せしかといふに、要するに彼れ等はそれ迄支那の小説なるものを知らず。又た東洋の小説なるものは先づ Arabian Night の如き怪談的のもののみと思つて居たが、此の書を見れば才子佳人の愛を骨子にして、知識階級の家庭の日常生活の事が微細に書かれて居る。日常生活の事が書いてあれども、事件の進行につれ、種種の波瀾があつて、それが面白し。又た此の小説によりて、西洋人には珍らしき支那の風俗習慣を知る事を得。殊に *deux Cousins* とある如く、此の書の主人公がついに佳人との結婚をなしたるが、其の佳人は一人にあらず。從姉妹の關係ある二人の佳人を同時に娶り、而してそれが本人達の尤も希望する所であつたので、此れ等の事は西洋人の考へには到底分らぬ事にて、それが又た餘程彼れ等の興味を引きたる事と思ふ。

支那にも法律にて重婚は禁ぜられたり。然し支那の風俗として、一子雙祧と云ふことあり。即ち兄に一人の子ありて、弟に子なき場合には、此の一人の子を、一方にては兄の子となし、同時に弟の後を嗣がしむ。この場合には、其の一人の子に、兄からも弟からも各各一人の妻を授ける。而してその生みし子は夫夫の孫となるなり。

こは祖先崇拜の國なればなり。尤もこの小説中に一子雙祧は無きも、かかる事が此の小説にも書かれたり。

(すじ書き略) 以上は『玉嬌梨』の梗概なるが、西洋人には支那の風俗、殊に二人の姉妹を同時に娶りて、彼れ等がそれに満足するなどのことは了解し難く、珍らしく思ふなり。一體、支那の小説は長きも、その筋は簡單なり。故に佛

譯、英譯、獨譯にもなるなり。固より小説としては高きものにあらずれども、支那の家庭社會の有様を知るには、極めて参考になるものなり。狩野直喜『支那小説戯曲史』一〇九―一四頁（一九九二年みすず書房）。

右は狩野博士が大正五年（一九一六）から六年にかけて京都大學文學部で行なわれた講義録である。編者の狩野直禎氏も言われる如く、『史略』とは極めてよく似る所がある。偶然の暗合にしろ、まるで魯迅が直接その講義を聞いたかのような感がある。

「佳話」 『史略』は大團圓で終る佳人才子小説を當時「佳話」とも稱したと言うが、その典據出處は未詳。内閣文庫藏本の素政堂主人序に「故其妬遇作合、爲人欣羨、始成佳話耳」とある。しかしここに言う「佳話」は恐らく普通名詞であつて、『史略』が言うようなある種の小説に限定的に使われる言葉ではないだろう。（序の全文は本篇2に引用する所を参照）。なによりもこの序は乾隆以後の刊本に附けられた天花藏の序とは内容がちがうもので、魯迅が目にした可能性はほとんどないから典據とすることはできない。また白話小説に「佳話」という題名がつくものでよく知られたのは清初の『西湖佳話』である。その序に「隨在卽是詩題、觸處盡成佳話。……因考之史傳志集、徵諸老師宿儒、取其迹之最著、事之最佳者而紀之」とは言うが、これも専ら才子佳人の團圓を言うものではない。むしろ本文の佳話は才子佳人に限らず、その結末は蘇小小の故事のごとき悲劇である場合さえある。近代漢語の専門家である佐藤晴彦氏を煩わせて電腦を駆使して調べていただいたが、十數萬の用例があり、然るべき例を検討しても、そうした用法は「絶対ない」とは言えないが、「まずない」という程度には言えるのではないかということであつた。その例の中にやはり小説のタイトルとして『梅蘭佳話』というのがある。これは主人公二人の姓を取った『玉嬌梨』式の命名法の長篇白話小説であつて、まさしく才子佳人の大團圓の結末なのだが、この一例のみでは、普通名詞とし

て讀め、とても小説の一ジャンルを指すものとは考えられない。佐藤氏の教示に對して、ここに誌して謝意を表す。

譯本 『玉嬌梨』フランス語譯に一八二六年 Abel Rémusat 譯『Les deux Cousines』一八六四年 Stanislas Julien 譯同名、英譯に無名氏譯『The Two Fair Cousins』がある。『平山冷燕』のフランス語譯には同じく一八六〇年 Stanislas Julien 譯『Les deux jeunes filles lettrées』があり、『好迷傳』にはフランス語譯に一八四二年 Guilliard d'Arcey 譯『La Femme accomplie』ドイツ語譯に一七六六年 C.G.von Murr 譯『Die angenehme Geschichte des Haoh Kjo'h』があり、タイトルの「好迷」を人名と誤解しているという。これは英譯からの重譯だといふから、英譯も誤解しているのだろう。英譯には一七一九年のものがあり、一八二九年の Davis による新譯『The Fortunate Union, A Romance』がある。

2 『玉嬌梨』今或改題『雙美奇緣』、以至其先乃改装自托于友白者云

一八十二

『玉嬌梨』作者未詳。「蕙秋散人編次」とある所からそれが作者だろうとする説、素政堂主人の序によつて素政堂主人或いは天花藏主人を作者に擬する説、「天花藏」からあるいは『平山冷燕』の作者と同一人物だとする説などがある。本篇3参照。

版本 この書は最初單行で出、のちに『平山冷燕』と合刻され『七才子書』と稱せられた。またそこから析出され『玉嬌梨』は『三才子書』、『平山冷燕』は『四才子書』とも稱される。清一代を通じて多數の刊本がある。ハーバー・ド・燕京圖書館藏の『新鐫批評繡像玉嬌梨小傳』不分卷二十回というのが康熙帝の諱を缺筆しておらず最も古い刊本とされる。次に内閣文庫藏本は素政堂主人の序の他に「緣起」があり、順治戊戌立秋月の天花藏主人の名のある、い

わゆる順治本とはちがう。少し降つて『新鐫繡像圈點秘本玉嬌梨』本衙藏版本は又別の一本である。内閣文庫本は集成本に影印され、本衙藏板本は春風文藝出版社の『明末清初小説選刊』（一九八一）に校點をつけて入れられ、人民文學出版社本（一九八三・『中國小説史料叢書』）は七才子書である寶仁堂合刻本をもとに標點されている。

魯迅が『雙美奇緣』と改題されるといふのは記述通りかなり遅く光緒になつてからであらう。光緒二十九年上海書局石印本が知られる。『所藏目錄』、『書帳』にも「日記」にも著録がないので、魯迅が據つた書をつきとめるのは難しい。

版本については林辰に『玉嬌梨』的版本（『明末清初小説述録』一九八八年春風文藝出版社）と題する考證がある。先に述べたように内閣文庫藏本の序は、後の版本の序とちがい、またそこに附された縁起も後の刊本では削除されて見られないので次に引いておく。但し『金瓶梅』王世貞ないしその門人作者説と同様、縁起の『玉嬌李』に關する説もどれだけ信憑性があるのか甚だ疑問ではある。

内閣文庫藏「玉嬌梨叙」云、世於男女悅慕、動稱風流、不知西隣之子亦有窺樓東里之施、不無挑達、止堪俎豆、登徒蒸嘗嫖母、題曰風流、斯云辱矣、必也琴心逗卓、眉撫画張。長生殿内深盟、玳瑁筵前醉態、白公之柳腰櫻口、崔君之人面桃花。他如温詐乎妹、阮哭諸隣、荀倩中庭熨冷、朝雲湖上參禪、紅線宵征俠氣、綠珠墜貞心、方足膾炙閨帷、誇揚婚好、使談者舌涎、聞者夢喜、何哉。蓋郎挾異才、女矜殊色、甚至郎兼女色、女擅郎才、故其姤遇作合、爲人欣慕、始成佳話耳。非盡人有求、卽盡人風流也。小説家艷風流之名、凡涉男女悅慕、卽實其人其事以當之、遂令無賴市兒泛情閨婦、得與鄭衙並傳、無論獸態顛狂、得罪名教、卽穢言浪籍、令儒雅風流幾於掃地、殊可恨也。每欲痛發其義、維挽淫風、其道末由。適客携玉嬌梨秘本示余。余讀之、見蘇友白才而美、白紅玉美而才、盧夢梨才美而俠、三人婉轉作緣、

時露悄心、忽呈嬌慧、不弄癡柔、卽吐香艷。明明色界、却非慾海、遊心其際、覺寤寐河洲之遺韻尚存、而衫衣鼓琴之流風不遠、正砥世之針、醫俗之竹、故不惜木災、用代絲綉、以一洗淫汚之氣、使世知風流有眞、非一妄男女所得浪稱也、何其快哉。客曰、白描繪事遜色牡丹、無絃焦桐讓聲羯鼓、倘優排操去取之權、牙儉秉春秋之筆、則子將奈何。予曰、不狀。是非識者定之。今方文人才女滿天下、風流之種不絕、當有子雲其人者、謂予知言。子其俟之。素政堂主人題。又「緣起」云、玉嬌梨與金瓶梅、相傳並出弇州門客筆、而弇州集大成者也。金瓶梅最先成、故行於世。玉嬌梨久而始就、遂因循沈閣、是以耳名者多、親見者少。客有述其祖曾從弇州遊、實得其詳。云、玉嬌梨有二本、一曰續本。是繼金瓶梅而作者、男爲沈六員外、女爲黎氏。其邪淫狂亂、刻畫市井之穢、百倍瓶梅。蓋有意醜詆故相、痛詈佞人、故一時肆筆、不覺已甚。弇州怪甚過情、不忍付梓、然通相傳寫者有之。一曰秘本。是懲續本之過而作者、男爲蘇友白、女爲紅玉、爲無嬌、爲夢梨、細摹文人才女之好色眞心、鍾情妙境。蓋欲形村愚之無耻、而反刺之者也。弇州深喜其蘊藉風流、足空千古、急欲繡行、惜其成獨後、弇州遲暮不及矣。故不但世未見其書、并秘本之名亦無識之者、獨客祖受而什襲至今。近緣兵火、岌岌乎灰燼之餘、客懼不敢再秘、因得購而壽木。續本何不並梓。曰、畏其淫甚、得罪名教、且非弇州意、故不敢耳。今秘本告竣、因述其始末如此。

『大略』寫印本二三・鉛印本一八と『史略』各版間の異同 『大略』寫印本では「今或改題『雙美奇緣』」が（ ）に入り、且つ「題」を「稱」に作る。「全書僅二十回」此の句なし。「晚年得一女」の「得」を「生」に作る。「因求爲子楊芳婦」の「楊芳」二字がなく、「玄招芳至家」の「芳」字上に「其子楊」三字あり。また「至家、屬妻弟翰林吳桂」九字なし。第二回の引用文中「這弗告二字寫得入神」の「弗」字鉛印本以後三八年版全集まですべて「勿」字に作り、五七年版全集で元に戻された。寫印本も「弗」に作る。

第二回引用文後の概略、ここは荒筋の説明の部分だから『大略』『史略』第一一版までのようにすべきで、三八年版全集で現行のごとく二字さげて改行することになったが、これは舊に復すべきである。「玄托其女子于翰林而去」、寫印本は「玄托其女子于妻弟吳翰林(珪)而去」に作る。「而張軌如遽窃以獻白玄」の「遽」字なく、「友白見紅玉新柳詩、慕之」を「友白既見新柳詩、甚慕紅玉之才」に作り、「甚服友白之才」の「友白之」を「其」一字に作り、「以監生應試」の「監生」を「納監」に作り、「易姓名游山陰」の「易」を「變」に作り、「于禹跡寺一少年姓柳」の「一」字なく、「即字以己女及甥女」の「即字」を「許」一字に作る。「己」字は訂正版より三八年版全集まで「已」に誤る。又寫印本は「歸而說其故云」の「而」字がない。

第十九回の引用文では「故當面一口就都許他了」の句末二字を寫印本から合訂二版まで「了他」に作る。三版で顛倒して「他了」になったが、これは校勘に用いた『玉嬌李』の各版本が一致して「了他」に作るころなので、舊に復した方がよい。

「而二女云々」も先の「白玄遂不允」の段落と同じ理由で、改行はするが二字下げない方がよい。

第二回引用文。校勘に用いたのは古本小説集成本、人民文學出版社本、春風文藝出版社本、東文研藏雙紅堂文庫本、又七才子奇書本である。「在軒子邊立着」七才子書本は「邊」字がなく、また「忽見上面横着……」の「忽」字もない。「却將告字讀了去聲」の「去聲」二字を上掲の書は皆な「常音」に作る。「便模糊答應」の「答應」二字を集成本、人民文學本、春風本は皆な「應道」に作る。

第十九回引用文。「却萬萬不能」の「却」字上掲書にはすべてない。「都許他了」上掲書はすべて「都許了他」に作る。

『師弟答問集』六〇頁云、「増田問曰」235 「謝家玉樹」玉樹ハ辭源ニ晉書謝玄傳ヲ引イテ「晉謝安問諸子姪、子弟

何與人事、正欲使其佳、玄答曰、譬如芝蘭玉樹、欲其生於庭階耳。」トアリマスガ、何與人事トハドンナ意味デスカ  
「若シ人間世界のコトガ勝手ニ出來ルモノナラ」ノ意デスカ「傍線に繋いで『何ゾ人事ヲ與ヘバ』ト讀ンデ」とあ  
る。「人に事<sup>ツカ</sup>ヘテ」ノ意デスカ？「人事ニ於テ」ノ意デスカ？ ナホ右全文ノ大意ヲ書イテ下サイ  
〔魯迅答曰〕 何與人事ハ人ノ事ト何ノ關係アル？人ノ事トハ自分ノコノ意。晉謝安ガ自分ノ子姪達ニ問フ、「子姪  
ハ目上ト何ノ關係アル？シカモノノ佳<sup>ヨイ</sup>デアアルコヲ望ムノカ？」玄答曰、「丁度芝蘭玉樹ノ様ナ良木ガ自分ノ家ノ庭ニ  
アツテホシイコト同様ノミ。」拙譯ト云フ可シノ

又六四頁云、「増田問曰」番外、b 生員（ト）監生（ノ）區別 共ニ秀才デアリ、且ツ鄉試ヲ受ケヤウトスル學生（學  
校ニ入レタカ？）デスカ？「欄外又曰」生員ハ秀才デアアルコトハ分リマスガ生員ハ入學生員ノ意味デ何カ學校ヘ入ッ  
テ居タモノデスカ——秀才ガ鄉試ニ應ズル爲メ特別ノ學校ヲ設ケテ、ソコヘ収容シタノデスカ？

〔魯迅答曰〕（生員）試験ニ及第シテ、秀才ニナツタモノ。「監生」童子デ優秀タルガ爲メニ國子監（昔ハ太學ト云  
フ）ニ這イテ勉強スルモノ、一定ノ年限タツト秀才ト同ジ資格ヲ有ス。（シカシ清朝ニハ金ヲ貢ゲハ監生ノ稱號買フ  
コトガ出來タ。）

3 『平山冷燕』亦二十回、以至（第二十回）

一九一七

『平山冷燕』作者 盛百二『柚堂續筆談』云、張博山先生（劭、號悔庵）、嘉興人、與查聲山宮詹、僚婿也。幼聰敏、  
十四五時、私撰小説未畢、父師見之、加以夏楚。其父執某爲之解紛曰、此子有異才、但書未完、其心終不死、我爲足  
成之。即所謂平山冷燕是也。今據朱一玄編『明清小説資料選編』（一九八九年齊魯書社）引、又見『小説考證』卷五。

阮元『兩浙輜軒錄』七云、張劭、字博山、嘉興人、著木威詩鈔。李方湛曰、博山少有成童之目、九齡作梅花賦驚其師。

讀書芝溪之法雲僧樓、閱三十晦朔、不設衾枕。及居父憂、哀毀成疾、服闋走京師、與長洲尤悔庵、宜興陳迦陵、鹽官彭羨門、華亭高謬苑、黃岡王吳廬諸先輩友善。未幾去游秦晉齊趙間、渡兩河、陟二華、登山臨水、弔古悲歌、輒發其牢落坎坷之氣、以爲詩。朱檢討竹垞稱其鎔鑄百家、有日爐風炭之手、至體物百篇、匠心獨出、尤足單行。光緒十六年浙

江書局重刊本

作者についてはもう一説あり、清初沈李友が嘉興地方の文人の詩を集めた『橋李詩繫』の小傳に見える説である。

『橋李詩繫』二八云、張秀才勻、勻、字宣衡、號鵲山、秀水諸生。年十二作稗史、今所傳『平山冷燕』也。又爲傳奇有『十眉圖』『長生樂』二十種。海内梨園爭傳播之。臨卒書云、赤剝來時赤剝還、放開笑口任顛頑、還時更不依前路、跳過瓊樓海上山。有鵲山堂集。庫本

『光緒嘉興縣志』によれば、張勻と張劭は父子であり、もし張氏が作者であるなら、順治戊戌の天花藏主人の序がある書の作者は父の方が妥當だということになる。趙景深『中國小説史略傍證』はその説である。但し、天花藏主人その人が作者だとする説もあり、未だ定説を見ない。林辰に解題がある（前掲『小説述録』）。

版本　いま見られるかなり早期の刊本は大連圖書館が藏する『新刻批評平山冷燕』不分卷二十回　荻岸山人編次　順治戊戌天花藏主人序を有するものである。これは最近「古本小説集成」に入った。これに附された天花藏の序は、合刻七才子書に附される、所謂「合刻七才子書序」と殆んど同文である。林辰は解題で大連圖書館藏本は、合刻本からの析出本であるとする。しかし書目からだけの判断ではあるが、現存する合刻本の最も古いのは、康熙四四年重刊の梅園刊本（北京圖書館藏。『大塚目』）であって順治間の刊本は見られない。見られないのは出版されなかったということにはならないが、假りに順治戊戌（十五年）刊本があつたとして、新しい作品が最初から他の書との合刻で出

版されるというのは考えにくい。しかも順治の天花藏序には、二書の合刻をにおわすような表現は一切ない。康熙四四年のは重刊だが、合刻は早くても康熙中と考えるのが穩當と思われる。大連本は原刊か重刊かはさておき、少なくとも合刻本からの析出ではなく、天花藏の序も『平山冷燕』のための序であつて、合刻の時點でその序を用い、もと『玉嬌李』にあつた序を刪つたのであろう。この書も刊本は甚だ多く、徐官城刊本、靜寄山房刊本等がある。近刊には集成本の他、大連本を底本とした『明末清初小説選刊』（春風文藝出版社一九八二年）本があり、『天花藏批評平山冷燕四才子書藏本』なる版本を底本にした『中國小説史料叢書』（一九八三年人民文學出版社）本、また通行石印本を景印した『中國近代小説史料彙編』（民國六九年臺灣廣文書局）本がある。

『大略』寫印本・鉛印本・『史略』各版間の異同　寫印本は「亦二十回」の「亦」字なく、「清盛百二」（『袖堂續筆談』）を「是書或謂」に作る。又鉛印本と共に「博山名劄」より「以此書附著于彼」までを闕く。第三版から第七版まで「博山」の「博」を「協」に誤る。「殊不類童子所爲」、寫印本に「殊」字なく、鉛印本と共に「童子所爲」を「少年手筆」に作る。なお寫印本は「是書或謂……」より「少年手筆」までを第二十回引用文の後に置く。「天子則大悅」、寫印本「則」字なし。「詔求真才」、寫印本「求」を「搜」に作る。白燕詩「不澆衣」の「澆」を寫印本は「澆」に作り、鉛印本から「澆」に作る。これは校勘に用いた諸本皆な「澆」に作るの、意を以て改めたものか。「天子即召見」これも三八年全集版から二字下げて改行するが、『玉嬌梨』と同じ理由で舊に復すべきである。「弘文才女」、訂正版から十一版まで何故か「弘」の末筆を缺く。「後黛以詩嘲一貴介子弟」、寫印本「後」を「已而」二字に作る。「俾官買送山氏爲侍婢」、寫印本「俾」を「使」に作る。「題詩而遇洛陽才人」、寫印本「而」字なし。「既至山氏」、寫印本「既」を「絳雪」に作り、また「則大得敬愛」の「則」字なし。「復因奔突登樓」の寫印本「復因」を「又以」

に、「至拜禱始免」の「始」を「得」にそれぞれ作り、「看傷風化」四字なく、「張又告發二人實平燕託名」の「又」字なく、「實」を「即」に作る。また「平中會元、燕會魁」の二句七字を「會元爲平、會魁爲燕」の八字に作り、「凡事無不美滿」一句がない。

『平山冷燕』引用文 書帳、日記、『藏書目錄』に著録がなく、魯迅が用いたテキストは特定できない。校勘に用いたのは古本小説集成本、新刻天花藏四才子書本（東文研藏）、七才子書本（東文研雙紅堂本）、氷玉主人批點本（東文研藏）、人民文學出版社本、春風文藝出版社本であるが、魯迅の引用文はそのいずれとも合わない。白燕詩は「浣」をすべて「浣」に作るのを除いて、人民文學出版社本は他本と大きく異なる。第二十回の引用では雙紅堂本を除いて「隨妝侍妾」の「妝」を「從」に作る。「一路」を上記のテキストはすべて「一路上」に作る。これは「上」字を誤って落したのかもしれない。「彩旗」これは皆な顛倒して「旗（旂）彩」に作る。「至今京城中俱傳……」の「俱傳」二字を雙紅堂本は「盛傳」に作り、四才子書本・氷玉主人本・人民文學出版社本は「俱盛傳」に作り、集成本、春風文藝出版社本は「尚傳」に作る。また集成・春風本は「而爲之立傳云」の「而」字を「因」字に作る。

『師弟答門集』六二頁云、「増田問曰」236 山黛の詩 夕陽憑弔素心稀、（傷む？） 遁入梨花無是非……瘦來只許雪添肥、（雪が肥らしてくれることのみ許す）？

〔魯迅對于前問答曰〕yes 〔又對于後問答曰〕yes 白燕デスカラ只夕雪デソノ上ニ加ヘルニ似アフ。〔評詩曰〕惡詩ト云フ可シノ

又六二頁云、「増田問曰」237 最後ノ行 因與絳雪易裝爲青衣、〔「與」に等號を附けて〕∥共ニ？or與……易（……と易へて一人で）〔魯迅答曰〕二人トモ

4 二書大旨、至固不能冲決而高翥矣

一九二五

「小説的歴史的變遷」見本篇1既引。

『大略』寫印本との異同 寫印本には「二書大旨、皆顯揚女子、頌其異能」の三句がなく、「是書或謂嘉興張博山十四五時作、……不類少年手筆」という叙述がここに置かれる。「又、頗薄制藝」の「又」を「大體」に作り、「詞華」を「才華」、「俊髦」を「眞才」、「惟在能詩、所舉佳篇」を「即能詩、而所舉佳篇」に作る。また「復多鄙倍」を「亦甚俚俗」に作り、「如鄉曲學究之爲」、「成婚待于詔旨」の二句なく、「則當時科舉思想之所牢籠」を「仍亦科舉思想之僕隸也」に作り、さらに後の二句を闕く。

5 『好速傳』十八回、以至以彰風化」也

一九三一

『好速傳』作者未詳。「名教中人編次」とする。阿英舊藏の好德堂刊本には「維風老人」なる者の序（後の引用文参照）があるというが、いずれも未詳。この書についても狩野直喜博士の言及があるので引いておく。

「支那小説史」第九、清朝の小説云、「好速傳」さて清朝の小説に就いては、先づ『好速傳』を挙げざるべからず。此の書は日本にも傳はりしと見え、馬琴の『俠客傳』は、大いにここに得る所ありしと云はる。又た西洋にも早く紹介せられしと見え、Wylie: Notes on Chinese Literature の中に、小説なる一門あり。そこに此の『好速傳』は Hau-Kiou-Choan or the Pleasing History なる題目にて著録せられたり。

又たコルヂェー氏の『支那書史』に據れば、昔英國人 Wilkinson なるもの廣東に住する事多年、支那語を學びしが、後ち本國に歸りて死せり。其の遺書を檢するに『譯好速傳』四卷あり。三卷は英譯にして最後の一卷は葡譯なりしを、Dr.Percy なるもの惜しき事に思ひ、葡譯より重譯し全部英譯となし出版せりといふ、唯此の翻譯は

Wilkinson の筐底より發見せしといふ丈にて、果して其の手になりしや否やを知る事能はざれども、奥書に一七一九年（即ち彼れが廣東を去りし歳にて、康熙五十八年に當る）と題するより察すれば、其の成りしは蓋し一七一九年或ひはその以前にあるを知る。余輩は又た之れに因りて、原書の成りし時代をも略推定すべしと思ふ。

何を以つて之れを言ふ。一體、此の書は支那小説の常として、著者も亦た其の時代も分らざれども、此の書の書出しを見るに、

話説前朝北直隸大名府有一箇秀才姓鐵雙名中玉云

とあり。一體此の北直隸は、南直隸に對する言葉にて、明のときには南北二京あり。北京に直屬する地方を北直隸、南京に直屬する地方を南直隸といつたものにて、清朝になりては、南京の名を決して官文書には用いず。南直隸を江蘇省と云ひ、北直隸を單に直隸と云ふなり。

さて此の小説は時代を明に置きし事は明白なり。而して記者が前朝といふより察すれば、清人より言を立てし事は申すまでもなかるべし。而して前に擧げたる如く、其の歐羅巴語に譯されし事康熙五十八年以前にありとすれば、成書も勿論其れ以前になからざるべからず。之れによりて此の書の成りしは順治より康熙の中年位ならんとの想像をなす事を得。

さて此の書は此くの如く一たび英語に譯されしが、之れより佛、獨、蘭の三語に譯され、又たこれより獨立して原書より再び英語に譯したるものあり。それは有名なる支那學者 Davis の譯にて題して *The Fortunate Union, a Romance, translated from the Chinese Original, with Notes and Illustrations, 1829* あり。其の外にも Douglas, 1900. Baller, 1904 等の譯あり。又た佛譯にも *Guillard d'Arcey, Hao-Khieou-tchouan, ou la Femme accomplie,*

1842等あり。

要するに前に擧げたる『玉嬌梨』と共に、西洋に早く紹介され、又た其の屢々彼れ等の國語に譯されたるより見れば、彼れ等が此の書に對して多大の興味を感じたりし事を知るべし。何故に興味を感じしかといふに、小説として全く面白くなき譯にはあらざれども、その時代には、支那の事情が未だ西洋に知られあらず。矢張り西洋人には書中に叙述されたる支那の社會状態が、頗る彼れ等に奇異の感を與へしによると思はるるなり。(すじ書き略)

以上は『好速傳』の大略にて、話の筋はつまらぬなれど、西洋の支那學者は早く之れを認めて翻譯せり。馬琴も此の小説を讀みて、その『俠客傳』を書くに、多く suggestion を得たりと云ふ。如何なる點が似てゐるやと云ふと、別に無きが如し。されど此の鐵生夫婦は義烈潔白の塊にして、一方は娘を救ひ、娘は男を救ひ、如何にしても戀愛が成立しさうなるに、戀愛の戀の字もなき程に作り。 (前掲『支那小説戲曲史』一一七一―一二三頁)

『好速傳』の版本 『日記』一九二三年一月十日云、游小市、以泉二角買『好速傳』一部四本。書帳には記録せず。

『魯迅藏書目錄』子部九、小説家類云、第二才子好速傳 四卷 十八回 清名教中人編次 民國十年 (1921) 上海掃葉

山房石印本 四冊。『大略』寫印本にのちの『史略』と殆ど變らぬ記述がある以上、一九二〇―二二年當時の大學での講義ですでに言及されていたわけだから、この書は直接には『史略』成稿に與らなかつたと考えられる。しかし民國十年 (一九二一) という小説史の講義と重なる時期の出版であるから、何處かでこの書を見ていたかもしれず、成稿の過程に何らかの關りがあつた可能性を全く排除するものではない。

狩野博士は前引の文にあるように、外國語譯の時期から考えて成書は順治より康熙中期までだろうと推測される。しかしその當時の版本が現存するのかどうかは不明である。ただ阿英はその『小説搜奇錄』(『小説三談』一九七九年上海古籍出版社) で、自分の手に入れた好德堂刊本が原刊に近いのではないかという口振りである。「余所得『好速傳』

本子、凡五六種、就中以好德堂本最精。單欄、每半頁八行、行二十字、寫刻。斷句用大圈、間有旁圈、大小相持、極美觀。版心高七寸八分、寬四寸二分。首有維風老人叙十一頁、大字每行隔線、半頁四行、行十字。此叙爲任何本子所無。(省略引用序文)『通俗小說目』據『野叟曝言』、稱此書爲清初人作。就刊本觀之、亦是順治間物。版式近于乾隆、又不及明末、此點蓋無可疑。書賈稱此類本子爲明刊、極不可信。書見于羅氏蟬隱廬鄴架者凡二年、競購者不乏其人、皆以價昂冷置之、然卒爲余所得、亦異數也。」その他では乾隆間刊とされる大連圖書館藏の凌雲閣本が最も古いようで、それに東文研倉石文庫の乾隆五十二年刊の振賢堂藏版本と同じく青雲堂藏版本が續く。最近「古本小説集成」に影印された同治二年刊の獨處軒本は出處を示さないが、返點送り仮名が附いている所を見れば日本の圖書館の藏書であらう。他にも刊本は多數ある。近刊では集成本の他一九五六年上海文化書社成柏泉校注排印本があり、これは光華堂本に據るといふ。又一九八〇年中州書畫社本は文化書社本を底本とする。同年廣東人民出版社據萃芳樓藏版排印本の他、底本不明の排印本が數種ある。

そのうち了した狀況の中で魯迅が據った版本を特定するのは難しい。第一回の引用文を次の諸本に據り對校した。獨處軒本(東文研雙紅堂文庫)、俠義風月傳光緒十八年序石印本(東文研)、民國八年上海鴻寶齋石印本(同上)、上海文化書社排印本、集成本。その結果鴻寶齋本、集成本とはかなりちがう部分がある。光緒十八年序石印本と上海文化書社本とは「動不動……」の前に「有不如意」一句四字を闕く以外はすべて一致する。この句は他本にもあるから、摘記の際に脱落した可能性がある。いずれにせよ特定は困難である。

『大略』寫印本・鉛印本、『史略』各版との異同、寫印本「其立意亦略如前二書」の「亦」字なく、「前」を「上」に作る。「書言有秀才……」の「書言有」三字なし。「其父鐵鏃爲御史」を三八年版全集より二字下げて改行するが、前

の各書の場合と同じ理由で舊に復すべきである。「即施智計奪以還愿」寫印本は「施」を「出」に、「奪」を「取」にそれぞれ作る。「然中玉亦懼禍」寫印本「然中玉亦」四字なく、また「乃至山東游學」の「乃」字なし。「復而方圖女」の「方」を「計」に作り、「皆以智免」を「皆以智計獲免」に作る。鉛印本と『史略』各版との間には異同はない。

6 又有『鐵花仙史』二十六回、以至世以爲戶解云

一四十三

『鐵花仙史』 作者未詳。本篇7に見るように魯迅は序を書いた「三江釣叟」を作者とする。「雲封山人」についても不明。『大略』寫印本は、「又有『鐵花仙史』」の「又有」二字なく、「題雲封山人編次」を「無撰人名氏」に作り、「言錢唐蔡其志……」の「言」字がない。また「一夕女自來、乃偕遁」を「一夕夏自來、乃相將免去」に作る。「免」はおそらく「逸」の誤りならん。さらに「偕遁者實花妖」の「偕遁者」三字を「此女」二字に作り、「以至雷法治之、妖逸去」の「雷」を「當」に誤り、「逸」を「遁」に作る。合訂二版より第七版まで「時紫宸已平海寇」の「寇」を「冠」に誤る。それ以外に鉛印本と『史略』各版の間に異同はない。

『師弟答問集』 六二頁云、「増田問曰」241 第一行—二行 一夕暴風拔去玉芙蓉、乃絕。交際ヲ絶ツ or 生命ヲ絶ツ  
〔魯迅答曰〕絶エテ來ナイ。〔「交際ヲ絶ツ」に對して〕yes

増田涉譯『支那小説史』二〇篇末云、譯者云ふ、清に入ってから才子佳人小説は綿綿と相ついで出でた、蓋し通俗的には所謂才子佳人は最も小説の好題材だからである。原著者は元來才子佳人小説なるものを價値なしと視るが故に——原著者が譯者に語つた言葉に、小説史を編むのだから所謂才子佳人小説もこれに入れなければならない、入れるとすると一々原作に眼を通さなければならなかったが、その内容の愚劣さには弱つた、これらを讀むには實に閉口し

た云云——だからここにも世に稱せられる四種を擧げるとどめ、清に入つてからこの跡を追つたものなどは盡く省略して言及もしてゐないが、然しこの種の小説は廣く蔓延したものの如く、且つ古く日本にもこの種の小説は少からず船載された——圖書寮の「船載書目」(これは元禄八年から寶曆四年までの船載書を著録したもの)や「小説字彙」(天明四年の題辭があるが、寛政三年の梓行)の援引書目、或は古い文庫や圖書館の藏書目録について見られるべし。最近に郭昌鶴は「文學季刊」創刊號及び第二號に「佳人才子小説研究」を書いて、この種のを一まとめにして研究したが、それによれば「才子佳人小説の存在するもの四十九部あり、目存し書亡ぶもの一部、共に計五十部」と云ひ、その書名を年代順に列擧して、卷回・撰人を録し、且つ就中著聞するものは稍々詳しく解題した。サイレン社版昭和十七年岩波文庫版「支那小説史」にも再録。

7 「鐵花仙史」較後出、以至已軼出于人情小説範圍之外矣

一四一四

各版間の異同 「大略」寫印本は、冒頭の三句「鐵花仙史」較後出、似欲脱舊來窠臼、故設事力求其奇」がない。「作者亦頗自負、序言有云」を「此書作者頗自負、序云」に作る。「然文筆拙澀、事狀紛繁」二句を「然記事雖較爲曲折、實嫌瑣碎」に作り、次句の「又」を「且」に作り、最後の「已軼出于人情小説範圍之外矣」を「已軼出于純、述人情範圍以外矣」に作る。また「往往略不加意」の「加」は五七年版全集で訂されたもので、「大略」寫印本からすでに「如」に誤る。

「鐵花仙史」版本 魯迅はこの作品を「玉嬌梨」「平山冷燕」「好迷傳」等と比べ「較後出」とするが、その成書の時期をどの程度考慮していたかは不明。ただこの章で扱う作品のうち少くとも「好迷傳」と「鐵花仙史」は明らかに清代の作品である。「好迷傳」は狩野博士の言の通り、「鐵花仙史」も林辰の證する如く、第十八回の本文に「故明」

と言うからには明人の作ではない（前掲『小説速録』一四三頁、また『中國歷代小説辭典』第三卷一七二頁）。しかしこれらが明末の才子佳人小説の流れを汲む作品であることに疑いはない。『鐵花仙史』の版本はこの章に扱われた他の作品に比して少ない。大連圖書館の藏する『繡像鐵花仙史』本衙藏版本が最も初期のものとされる。これは最近『古本小説集成』に入った。また恒謙堂藏版本も『古本小説叢刊』に影印された。叢刊の序に據れば康熙間の刊本だとする。二つの影印本を比較してみれば、恒謙堂本が繡像の最後の二葉を闕く他は、その版式はまったく同じと言ってよく、その間には明らかな繼承關係がある。前者は『明末清初小説選刊』（一九八五年春風文藝出版社）で排印本となった。他に光緒十七年排印本（丁錫根編著『中國歷代小説序跋集』下冊一三三五頁 一九九六年人民文學出版社）、光緒壬辰（一八）年申浦石印本（東文研）、『繡虎堂評閱』と題する本（朱一玄繡『明清小説資料選編』一九八九年齊魯書社）等がある。ところで魯迅が據った版本は何かとなると、引用した序文の校勘だけから言えば、すべて上記の版本とはちがうのである。「才子佳人之悲歡離合」は「離歡」と顛倒し、「以供人娛目、悅心者也」は「以供人娛耳、悅目也舊矣」に作り、「然其成書……」は「然其書成……」と顛倒する。その他本衙藏版本、恒謙堂本、「繡虎堂主人評閱」本は「皆才子佳人之姓爲顏」の「皆」を「卽」に、「摘其人名之一字以傳之」の「傳」を「弁」に作る。ただ光緒十七年排印本と光緒十八年石印本（この二本はあるいは同一の本かもしれない）は「皆」「傳」に作り、これは『史略』引用と同じである。前記以外の版本がないとすれば解釋に窮する現象である。